

10月19日(水)は、平野先生による算数科の研究授業でした。本単元では、くり上がりのある加法計算で加数や被加数を分解して計算する「たしざん」の学習をしました。本時は、5/10時間目です。既習をもとに計算したり、被加数を分解して計算する方法を考えたりしながら学習していきました。

本時の授業と事後研究の様子をお知らせします。

単元名 「たしざん」全10時間(東京書籍) 1年1組 平野 幸 先生
本時の目標：くり上がりのある加法計算で、被加数を分解して計算する方法を知り、計算の仕方についての理解を深めることができる。
本時における見方・考え方：被加数と加数のどちらかを分解して10をつくと計算することができることに気づくことができる。



本時の板書5/10



平野先生による授業のリフレクション

ブロックの扱いは難しかったが、子どもの実態に応じて扱うことがいとわかった。この時間のブロックの操作はどちらを10のまとまりにするのかを考えるための視覚的支援でよかったのかなと思った。5時間目の授業でも、子どもたちはノートに考えを書いていたので、もう少し練り上げの場面(2つの考えの似ているところと違うところ)を丁寧な指導で行えるとよかった。

授業参観の視点(3点)に沿ってグループで協議を行い、全体共有しました。(抜粋)

- 1 本単元で身に付けさせたい資質・能力を育成するための主体的・対話的な学習活動の設定**
 - 学習規律が定着している。
 - ▼ペア学習を取れ入れ、自分の計算の仕方を説明する場面があるとよかった。
 - ▼多様な考えを出しやすい活動や困らせる場面をつくることで、より主体的・対話的な活動につなげたい。
- 2 児童が本気になる問題や課題の工夫**
 - 体育で行った玉入れをICTで想起させるなど、他教科と関連させた導入から、数学の世界へとつなげて課題設定しているのがよかった。
 - 1年生の発達段階に応じた玉入れの具体物や提示の仕方の工夫が、児童の興味付けにつながっていた。
 - ▼既習事項を導入時に扱っていたが、本時では似たような式になるため、知的好奇心が持てるものになっていた。どのような場面で既習事項を扱うか考えていく必要がある。
- 3 「数学的な見方・考え方」を働かせるための手立てや働きかけ**
 - 既習内容が定着し、10のまとまりでみるという見方ができている。
 - 「同じところ」「ちがうところ」の視点は、数学的な見方・考え方を働かせることにつながる。
 - ▼式、ブロック操作、言葉の提示の仕方をそろえると見やすく、捉えやすい。
 - ▼ブロック操作をどのように扱うとよかったのか。⇒児童の実態に応じて効果的に扱うようにする。
 - ▼加数、被加数のどちらかを分解して計算してもよいが、より簡単に計算できる、ブロック操作が早くできるよさにも気付かせたい。

平野先生の研究授業から、他教科と関連させ、具体物の提示を工夫した課題設定の仕方や、1年生から式、ブロック、図、言葉で説明することの大切さを学ぶことができました。これからの授業づくりにおいて、困らせる場面をつくることで、子どもの思考を促したり、多様な考えを引き出す活動などを取り入れたりしながら主体的・対話的な学習につなげていきたいですね。

<板書交流>

学校訪問時の板書写真をもとに意見交流をしました。良い点がたくさん見られる板書が多く、日々の先生方の授業改善への取り組みがよく分かります。意見交流では、「チョークの色づかいがよい」「カードを活用して分かりやすい」「他教科を生かした問題づくりがよい」などの気付きが出されました。『授業改革ハンドブック』に記載している板書する際の留意点の中の「児童の思考の流れに沿った構造的な板書」、「児童を参加させた板書」の2つを特に意識して、これからも板書を工夫していきましょう。

